形成外科の歴史
（古代インドから19世紀イギリスまで）

国立成育医療研究センター
特命副院長（医療安全・感染防御担当）
感覚器・形態外科部長
金子　剛

Gaspare Tagliacotti 彫像：1995年６月27日ボローニャ大学解剖学教室講堂にて筆者撮影

今回初めて余滴を担当させていただくことになったが，専門は形成外科であるので，形成外科の歴史の一部を紹介させていただこうと思う．

本年は日本形成外科学会創立60周年であり，人間で言えば還暦にあたる．多くの基本診療科の学会が100年を超えることを考えると若い学会であるが，形成外科の手技としては，鼻の再建を軸として2000年以上の歴史があるとされている．というのも，かつては姦通罪などの犯罪者に対する見せしめや戦争捕虜の印として，鼻尖部をそぎ落とす鼻削ぎの刑が行われてきたからだ．

最も古い記録としてはススルタ大医典（BC２，３世紀）の造鼻術が有名であり，鼻尖部の皮膚欠損に対して頬部の皮膚を上方茎の皮弁として移行する方法（古代インド法造鼻術）がサンスクリット文字で記載されている．

しかしその後再び造鼻術が歴史上に現れるのは，およそ1700年後のルネッサンス後期16世紀のイタリアの手術書である．上腕皮弁による外鼻再建術（イタリア法造鼻術）であるが，その手技はもともと15世紀からシシリアやカラブリアの医家で行われており，門外不出の家伝として伝承されていた．その手技を後にボローニャ大学の解剖学・外科学教授，病院長となる Gaspare Tagliacotti が習得し，より安全な手術法を確立して美しい22枚の木版画と共に1597年 De Curtoum Chirurgia per Insitionem（The Surgery of Deformities by Transplantation）にまとめて出版した．この功績により“形成外科の父”と称されている．

Tagliacotti は，なぜ門外不出の手術手技を，手術書として情報公開したのだろうか？記録に寄れば，いかなる医師も記載通りの手順を踏めば成功できるような手術書を通して再建手術の成功率をあげることによって，諸事情により鼻，耳，唇などを切断された患者へ恩恵を与えることにあったという．

しかし，残念ながらTagliacottiの想いは報われなかった．余りに高名になったことに対する妬みや嫉み，造鼻術の治療期間が長期に及ぶことへの他の外科医からの反発，カトリック教会からの圧力などでこの「イタリア法造鼻術」は禁止されてしまい，Tagliacotti 自身も死後破門されてしまったのである．

次に造鼻術が歴史に登場したのは，19世紀のイギリスであった．当時知識階級向けの雑誌としてロンドンで刊行されていた Gentleman's magazine 1794年10月号に，インドにおける煉瓦焼きカーストの手術屋による（古代インド法造鼻術とは異なる）珍奇な手術の見聞記として発表されたのだ．

この雑誌により，全く新しい造鼻術が思いがけず東方からもたらされたわけだが，これを読んだロンドンの外科医 Joseph Carpue は，周到な準備の後に1814年に追試して有用性を実証した．この手術手技は，前額中央部の皮膚を皮弁として外鼻欠損部に移行させるもので，今日でも前額皮弁（インド法造鼻術）として施行されている．

このように形成外科手術の歴史を紐解くと，やはり転機は Tagliacotti の手術書による情報公開であったわけだが，それを可能にしたのは，同時代の発明である活版印刷術や図版印刷である．

さて現在はどうであろうか？　IT の分野に限っても，1995年のインターネット元年，2013年の３Dプリンター元年，最近では AI（人工知能）など，グーテンベルグによる活版印刷術の発明に匹敵する技術革新の真っ只中にあるという．我々医療者もこの波に乗り遅れないようにしたいものである．

【参考文献】

倉田喜一郎：植皮の歴史　克誠堂出版，東京，1986
Ira M. Rutkow : Surgery : An Illustrated History. Mosby-Year Book，St. Louis, 1993
Roberto Margotta : The History of Medicine. SMITHMARK Publishers，New York, 1996
K. L. Bhishagratna 英訳, 伊東弥恵治，鈴木正夫邦訳：アーユルヴェーダ　ススルタ大医典　人間と歴史社，東京，2005
プランタン＝モレトゥス博物館展　印刷革命が始まった（グーテンベルクからプランタンへ）印刷博物館, 東京, 2005
野口悠紀雄：知の進化論　朝日新聞出版，東京，2016